

FDS Report

Faculty Development Staff

学生FDスタッフ活動レポート 2011

vol. **5**

CONTENTS

- 01 本冊子の発行にあたって
- 02 活動紹介
- 03 授業インタビュー
- 06 学生FDサミット
- 08 学生インタビュー
- 09 学内しゃべり場
- 10 他大学交流
- 11 春企画・ニュースレター・授業アンケート
- 12 編集後記



編集スタッフ(2011年度学生FDスタッフ)

| | |
|------------|-------|
| 文学部 4回生 | 久野 敬介 |
| 経営学部 4回生 | 横江 利優 |
| 経済学部 3回生 | 野村 美奈 |
| 法学部 3回生 | 鏡 凌太 |
| 理工学部 3回生 | 木下 明紀 |
| 政策科学部 2回生 | 澤野 俊英 |
| 文学部 2回生 | 伝保 香織 |
| 文学部 2回生 | 谷本 未来 |
| 産業社会学部 2回生 | 田中 翔 |
| 文学部 2回生 | 澤田 亮 |
| 法学部 1回生 | 岩佐 香織 |
| 政策科学部 1回生 | 佐藤 陽 |

R
RITSUMEIKAN

+R 未来を生み出す人になる。

立命館大学

冊子の発行にあたって

この冊子は、教育開発推進機構が進めるFD活動に参加する学生FDスタッフと教育開発推進機構が協力し、作成した冊子で、2011年度の学生FDスタッフ活動を中心に紹介しています。スタッフが取り組みを通じて得たもの、学生が大学や授業に対して感じていること、先生方が授業に対して持っている想い、授業への工夫を少しではありますが紹介しています。是非ご覧いただければ幸いです。

2012年3月 立命館大学教育開発推進機構

活動紹介



What's FDS?

学生FDスタッフとは

FDとはFaculty Developmentの略称で、大学による組織的な教育改善活動のことを指します。聞こえは難いようですが、学生FD活動は学生のニーズに合った大学教育や大学生活を実現するための活動といったニュアンスで捉えていただければよいと思います。

一般的にFDの担い手は教職員とされていますが、立命館大学では学生の参画を得てFDを推進しています。私たち学生FDスタッフは教育学部教育開発支援課に属する学生スタッフで、学内では「学生と教職員の橋渡し」「学生が望む大学づくり」を教職員と共に進めています。また、学生FDサミットの開催をはじめとして、学生FDに関心のある他大学の学生、教職員との交流も活発に行っています。

学生FDスタッフの特徴は、学生の想いや考えから活動が生まれるという点です。現在はまだ活動の内容を具現化して学生に還元が出来ていない状況ですが、今後も学生の声を大切にして、よりよい大学づくりを行いたいと思っています。

政策科学部2回生 澤野 俊英



木野先生より

本学の学生FDスタッフの前身は2006年に誕生しましたが、学生が大学の教育を良くしようという活動を始めた大学は当時まだ珍しい方でした。しかし、2009年に学生FD活動の全国化を目指して「学生FDサミット」を立ち上げて以来、今や45大学にも広がり、サミットには全国から300名以上の学生・教職員が集まっています。学生FDとは学生の視点で授業や大学教育を良くしようという活動ですが、同じ思いの私たち教職員も出来る限りの支援を続けています。今夏も本学でサミットを行います。サミットでは「他大学から自大学にないものを学ぶ」だけでなく、「他大学との交流で自大学の良さを発見する」こともしばしばです。大学を良くしたいと思っている学生同士がつながるだけでなく、同じ思いの教職員ともつながることで、大学を変えるだけでなく、大学生としての自らの成長を目指しませんか。

共通教育推進機構 木野 茂

2011年度はこれまでの取り組みを継続し、学生FDサミットやそれに類するイベントを通じて大学間の交流を進めることができました。

また、特筆すべきは、「学生FDサミット2012冬」を追手門学院大学で実施することができたことです。初めて本学以外で学生FDサミットが開催され、今まさに学生FDが拡大しつつあるという実感があります。

2011年度は新たな活動や展開について考える機会とすることができました。これをうけて、2012年度は本学にて実施する予定の「学生FDサミット2012夏」やその他の取り組みにも期待していただきたいと思います。

引き続き、学生FDスタッフの成長と学内への成果還元を目指して支援して参ります。

教育開発支援課



授業インタビュー

01 Interview

地域人として生きるために ～今わたしたちにできること～

授業名 地域参加活動入門

担当教員 山口 洋典

開講学部 一般教養

インタビュー 岩佐 香織

授業内容

本講義では、地域参加活動へ誘う動機づけをおこなう。また、活動に参加するための心構えを身につけることも目的としている。本講義では多くのゲストスピーカーが登場する。地域参加活動の意義・現状・課題を整理し、方法を学び、活動するための準備となることを目指している。

印象に残った理由

授業の中でフィールドワークをすることが面白いと思った。また地震が起きた東北でのボランティアを先生自ら行きその様子を伝えて、これから私たちにできる身近なボランティア活動を授業を通して紹介したり、生きていくうえで大事なことを文章ではなく体で感じられる授業だと思った。

Q. 授業の中で、実際に外に出て好きな石を拾うことや好きな写真を撮るといった活動がありますが、どのような意図で始められたのですか？

A. 与えられた問いを引き取って自分の答えをひねり出してくるという、いわば日常風景のドリルをしようと考えたからです。起伏にとんだ日々の中で何気ない一つの出来事に思いをはせてほしい。そのために投げ続けた問いをきっかけに自らの関心を意味づけしてほしいと思って始めました。

Q. なぜフィールドワークが大事なのでしょう？

A. 大学の学びは通常デスクワークが中心です。しかし、フィールドワークに行くことで実際に現場で得たことが整理され、いっそう学びが深まります。これは旅行に行つてアルバムに整理することに似ています。現場で出会った人や場所や出来事を整理しまとめる際に、そこに行く前には関心がなかったことでも興味を抱いて調べているのではないのでしょうか。こうして、フィールドとデスクを往復することで、調べる、まとめる楽しみに浸ることができます。そして次の旅行先を決めるがごとく、次の学びの目的や目標を定める習慣がついていくはずですよ。

Q. このような実践的な授業の中で一番工夫していることは何ですか？

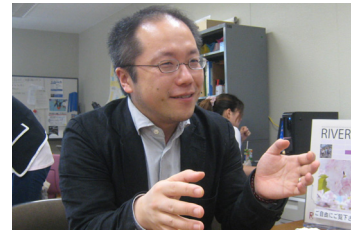
A. キーワードは「ブーメラン」です。教員やゲストの話を聞いて満足するのではなく、そこから自発的に行動してほしい。究極的には「地域参加」を掲げる講義ですから、誰も教室へ来ずに地域にいたことが理想かもしれませんが。逆にまちなちに出てからこそ学びを深めたいと戻って来てもらえればと思っています。そのため、まずはボランティアなどに参加したくなるような仕掛けを埋め込もうと心がけています。

Q. 先生は被災地へ行かれたりしていますが、今後どのような活動しようと考えていますか？

A. 阪神・淡路大震災を経験した私たちの世代と東日本大震災を経験した人々との世代の違いを大事にしたいと思っています。特にボランティアやNPOという言葉が市民権を得ている今と昔は違います。その中で、人とお金はどのように現地でまわるのか、新しい日常をどう取り戻すのかを考えたい。ボランティアで大事なことは「する」側が「される」側の役割を奪わないことです。つまり現地に駆けつける私たちが現地の方々に何かを頼むことで、地域で培われてきた営みを大事にしたいと思っています。

Q. 最後に学生へのメッセージをお願いします。

A. ぜひ、モデルとライバルを探しあててほしいと思います。この人になりたい、あるいはこの人には負けない、というようないい意味での競争相手を身近につくってほしいと思います。お互いを高めあう相手を見つけることは、考えるよりは簡単、しかし想像以上に難しい。けれども、少し相手に対して敬意を払えばよい関係が結ばれる。そういつたかけがえのない仲間を大学生活の中で見つけてほしいと思います。



02 Interview

憲法I (憲法を身近に感じながら、法学を学ぶ)

授業名 憲法I

担当教員 倉田 玲

開講学部 政策科学部

インタビュー 佐藤 陽

授業内容

この授業科目では、法学の観点から、日本国憲法に基づいて保障される「基本的人権」について解説します。『基本的人権の事件簿(第4版)』を教科書にして、現実の事件を講義の具体的な題材にしながら、日本国憲法の実存理由や活用方法を論理的に考えてもらうための授業科目です。

印象に残った理由

この授業の魅力は何と言っても憲法の実存を身近に感じられるところ。そこで、先生の授業方針や学生に対する思いについてもっと知りたいと考え、インタビューしました。インタビューを通して、先生が学生に様々な学びの可能性を提供しようと工夫されていることが分かりました。

Q. 今回の憲法Iの授業を通しての目標はどのようなものですか？

A. 法学の法學らしさ、世の中で特に重要なルールの世界を理屈の観点で読み解くというふうな論理のところを、難しそうだと遠ざけてしまわないで、こういうところも勉強だというように政策科学部の学生に勉強してほしいと思っています。ちょっと系統の違う勉強をしていくのも大学。専門的な勉強だけをやるのではなく、自分の中にある可能性を見出して貪欲に学んでほしいという気持ちから、様々なオプションを提供しようと思い、その一環として、この授業を行っています。つまり、政策をたてる時に必ず必要となる法学という要素を学生に理解してほしいという気持ちで授業を行っています。

Q. 教えるときに特に意識していらっしゃることはどのようなことですか？

A. 様々な学びの可能性を提供するのが僕ら教員の仕事だと思っているので、政策科学部開講科目というのを意識しすぎるのではなく、学生の学びたいと思う気持ちに応えるべく、教壇に立っています。



Q. 教科書に『基本的人権の事件簿(第4版)』を選定されたのは、学生に憲法の実存を身近に感じてもらうためでしょうか？

A. まさしく、そうです。難しすぎる本ではなく、せっかく経済的負担をして購入してもらうのですから、手軽で最新の本を指定しました。この本の魅力は憲法を身近に感じられること。もちろん補足すべきところは板書で補足しています。

Q. 先生はインタラクティブシートを効果的に活用されていますが、そこにはどのような考えがあるのでしょうか？

A. 本当は学生1人1人と目を合わせながら授業を行っていただきたいのですが、何百人というクラスでは物理的に無理なので、せめてもその思いからインタラクティブシートを通して学生との交流を図っています。授業時間を割いて学生にインタラクティブシートを書いてもらうので、その分は次の授業で学生にしっかりとフィードバックし、今後の授業方針を示すとともに、場合によっては学生の意見を直接聞き、授業運営に反映させています。

Q. 最後に学生へ一言お願いします。

A. たくましく頑張ってください。1人1人には、意外性を発揮してほしいです。そして、意外性をもった学生の集団には多様性を見せてほしいです。

授業名 行政法I
担当教員 正木 宏長
開講学部 法学部
インタビュー 鏡 凌太

授業内容

この授業では行政法のうち、行政法総論について学びます。具体的には国や自治体といった行政機関が、民間事業者の取り締まりをするとき、どのような法の拘束を行政が受けるのかを学びます。

印象に残った理由

資格試験対策で受講する学生にも配慮がなされていたことが印象的でした。また、とにかく受講生が多かったことも印象に残っています。基本的な法源がないため抽象的と敬遠されがちな行政法をわかりやすく学ぶことができたので、今回インタビューを行いました。

- Q 先生のレジュメはすごく充実していてわかりやすいですが、難解なイメージのある行政法をわかりやすく教えるために、何か工夫していることはありますか。
- A 難解な概念が出てくるときは、具体例を示して、例を通すことで、分かりやすくする工夫はしています。それはレジュメに書いた仮想事例であったり、具体例として使えるような判例を適宜紹介するという形でやっています。
- Q 先生はよく「こういうところが公務員試験で出たりする」と指摘されますが、先生はそういう資格試験対策で受講する人にも配慮して講義をされていますか。
- A 学生の頃、僕自身公務員試験を受けたことがあって、その当時の知識に基づいて説明したり、あるいは最近の問題を見て紹介したりしていますね。ただ大学の講義としてやるわけで、公務員試験講座の授業ではないから、あまりを言い過ぎないようにと思っています。
- Q 僕は勉強を進めていく中で行政法が、とっつきにくいと感じたのですが、学習の一助とするためにも行政法の魅力について教えていただけませんか。
- A 専門用語が多く、判例を理解するうえでも最初のつまずきになっているみたいですね。公務員試験知識でも土地区画整理事業計画や第二種市街地再開発計画などテクニカルタムが出てくるのですが、それが難解なイメージや地味な印象を与えているかもしれませんね。行政法は教科書に取り上げられている以外では、地方分権改革や行政改革、公務員制度の改革など行政の現場の第一線の問題も扱っているわけです。授業で言及することは少ないの

ですが、学問自体としては近時の重要な政治改革・行政改革のトピックを扱う華やかな分野であるとは僕は認識しています。

- Q 大教室での私語問題について先生はどのようにお考えですか。

A 大教室の問題になるとどうしても明学館の問題になりますね。私語問題が発生していることはわかるのですが、後ろの方の私語は教員の耳には届かないんですね。問題があることは把握しているのですが、なかなか注意がしにくいというのが明学館に対する感想です。

- Q 最後に学生にメッセージをお願いします。

A 勉強を始めるきっかけは様々でしょうけど、やるからにはしっかりとやってほしいです。あと、勉強というのは自分が努力した分成果が出るのであって、自分で自習をする部分をおろそかにしないでほしい。教員が関与して学生を成長させることができる部分には限度があると感じることが多いです。勉強して力がつくというのは授業を聞いたうえで自分がどれくらい咀嚼できるか、自習できるかにかかっている部分が大きいと思います。自分の勉強を大事にしてほしいです。



授業名 行動分析学
担当教員 谷 晋二
開講学部 文学部
インタビュー 伝保 香織

授業内容

心理学の行動分析学について学ぶ授業です。行動分析学とは、個体の行動を読み解こうとする学問で、この授業ではその行動分析学の基礎について学んでいきます。前半には、行動が起こるメカニズムについて、後半には問題行動の対処法について学びます。

印象に残った理由

この授業は、一見とっつきにくい「行動分析学」を扱っている授業でありながら、先生がわかりやすく授業を進めておられたことが印象的でした。先生が教壇から降りて、教室の中を動きながら授業をされる様子や、コミュニケーションペーパーの丁寧なフィードバックが印象に残りました。

- Q 先生の授業は、二回生以上の学生が履修可能となっていますが、先生は何回生の学生を対象として授業をなさっていますか?
- A 僕が対象としているのは、二回生の学生です。「授業についていけなくてつまらない」と、学生が思ってしまうような授業にしたいと思っています。僕の研究理念が「楽しく学ぶ」なのでわかりやすい授業を心がけています。もちろん、大学院生対象ならもっと専門的な授業をしています。
- Q 私語対策はどのようにされていますか?
- A 私自身は、私語は気にならないのですが、後ろの方に座っている学生さんから「私語が気になる」という意見をいただきました。それで、僕はどのようにしたら私語をしている学生が黙ってくれるか考えました。その結果、話している集団の近くに行くようにしたら黙ってくれました。僕の授業では学生を叱って私語をやめさせることはしません。これは行動分析学の根底にある、「負の行為で行動をやめさせることをしない」ということを実践しているのです。



- Q 先生は、授業時に集めた意見を、その次の授業に反映させるなどコミュニケーションペーパーを有効に活用されていますが、なぜそのような方法をとられるのですか?
- A 僕は以前、違う大学にいたのですが、そこではコミュニケーションペーパーというものが存在しませんでした。しかし、立命館大学にきた時にコミュニケーションペーパーがあることを知り、これを活用してみたいと思いました。このコミュニケーションペーパーでは、内気で授業中に発言ができない学生の意見も聞けるので、勉強になります。ただ、コミュニケーションペーパーの活用については、他のツール(メールやWEB)の方を活用すればよいのか、どれが一番学生の意見を聞けるかわからないので、その点は未だに模索中です。
- Q 先生の授業を受けている、もしくは受けるであろう学生に一言お願いします。
- A 「授業を楽しんで」と言いたいですが、そのためには、学生側と教員側の双方向の働きかけが必要です。一つのテーマについてじっくり話し合っていきたいのですが、大人数では難しいし、授業だから、ある程度誘導しなくちゃいけない。ただ、こちらから誘導してはかりするような授業だけでなく、学生も教員も一緒になって考えていけるようなことをやっていきたいです。

05

問題を客観的に分析し、方向性を示せるような、真のリーダーの素養を身につけてほしい！

授業名 東アジアと朝鮮半島

担当教員 浅井 良純

開講学部 経済学部・経営学部

インタビュー 野村 美奈

授業内容

この講義では、核やミサイル、拉致問題など、様々な物議を醸し出している北朝鮮を中心に扱っています。また、北朝鮮を取り囲む周辺諸国（韓国、中国、ロシア、アメリカ、日本）の動き、関係を踏まえつつ、東アジア地域統合のありようを考えるものとなっています。

印象に残った理由

北朝鮮はただの危ない国だと思っていた認識を180度変える授業だったからです。先生の主観ではなく、歴史的事実、客観的な視点に徹した授業なので、とても説得力があり、歴史の苦手な私でも毎回楽しみになるくらい面白い講義でした。背景や、思惑についても分かりやすく、面白いなんて…ぜひこの講義を受けてみてください！

Q. 授業の構成、内容で工夫している点はなんですか？

A. 朝鮮半島の問題なので、関心のあるものから掘り起こすようにしています。たとえば、日本人の拉致事件の問題。この理由・背景を知る人はいないので、それを説明すると言えば関心を持つ人が多いです。核問題やミサイル問題についても取り扱います。これらをメインに第7回目までの講義で拉致事件が分かるように講義を配分しています。後半部分では、今までずっと拉致事件を否定してきたのに今になって謝罪した理由、あるいは核問題が分かるようになっていきます。結果的にはいわゆる東アジアと朝鮮半島の学ぶべき内容が一通り学べるようにしています。

構成面では、就職活動や、教育実習、体育会のクラブ活動などのために毎回出席できない人の事も考慮しています。15週全て来ることは難しいですから、途中で休んでも分かるように、1回1回独立した形に作ってあります。しかし全て聞くと、あらゆる観点で繋がっていることが分かるようにも構成してある。あとは、実際に役に立つ内容でなければなりません。基礎学問と違って、教養は役に立つという実感がなくと身が入らないだろうと思いますし、そこも意識しています。



Q. 私語対策についてはどうお考えですか？

A. これは深刻な問題です。私の授業は教養なので、前まで400人とか500人登録者がいました。そこで私語が出ると授業になりません。私語をした人には、基本的には注意します。1回目は、次はアウトだよ、次注意したら単位認定しませんよ、とやさしく注意する。全体の前で指摘するので、その人は恥をかき、他の人にも、単位が取れなくなるということを植え付ける事ができます。僕は学生に対して一番効力があるのは、単位のことだと思っています。結局、関心のあるテーマを扱うことと、単位に関わる事で対応することが、効果があるのだと思います。

Q. 最後に学生にメッセージをお願いします。

A. 問題のあるところに関心を持って欲しい、この一言です。僕の時代には、殆どの人は、アメリカに関心を持っていました。でも僕は朝鮮半島に関心をもちました。そこに問題があるから。それで留学もしました。結局それで、大学でこういう講義ができる道が開かれたのです。歴史的な視点から問題を客観的に分析し、解決できる方向性を出せるような人になってほしい。問題を解決する際に、必ずそういう人が中心的な役割を果たせる人材になれるはず。当時は周りから反対されましたが、結局、今北朝鮮の問題が注目を浴びた時に、それについて講義ができます。ある程度役割を果たせていると思っています。周りが評価しようがしまいが、問題のあるところに関心を持つこと、というのが、私の…“人生の教訓”ですね。

06

真に生徒のことを考えることの出来る教師になるためには

授業名 特別活動の研究GB

担当教員 椋本 洋

開講学部 教職科目

インタビュー 久野 敬介

授業内容

特別活動は学校教育の中で重要な役割を担っています。それは学校だけに終始するものではなく、家庭や地域社会との連携をも含めた広い領域の中で、児童、生徒の成長に関わってくるものだからです。本授業では、以上のような視点を鑑みながら、学級活動、生徒会活動、学校行事といった特別活動の中核的な領域の考察を行います。

印象に残った理由

椋本先生の授業は「生徒によりそう」という姿勢を基礎とし、学級崩壊やモンスターペアレントなど現代の学校教育が抱える様々な課題について考察していきます。先生の取り上げられる課題は、どれも学校現場と密着したものです。そして、それらの課題の考察は、受講生が実際に教職についた際に役立てることの出来るものとなっています。

Q. 大学における教員養成の在り方が変化しつつある中で、特に「学級経営」に関する当該授業が果たす役割を教えてください。

A. 現代の社会においては、親子関係や地域の人々との関係が変化し、それにとともなって子どもの教育の在り方も大きな転換が求められています。そうした子どもを取り巻く地域社会とともに、学校も子どもの教育に関して重要な役割を担っています。しかし、学校教育を担う教員の養成に関しては、教科教育に比重がおかれ、学級経営や学校経営などの能力形成は履修の面からしても単位数が少ないのが現状です。そうした中で、特別活動の研究では「生徒によりそう」ということを主眼に授業を行っています。具体的には、まず学生に自らの体験をふり返らせることで学級における教員の役割を考えさせます。そこから、学生に自分が担任であれば学校行事などをどのように運営していくのかということを考えさせ、学級経営案の作成をしながら体系化させます。また、先述の社会的変化ということに関してはモンスターペアレントや学級崩壊、生徒の問題行動など、担任がぶつかる様々な問題に関しても学生に考察させます。

Q. 学生にグループによる問題の考察を行わせる理由をお聞かせください。

A. 学生にグループワークを行わせるのは学校が組織で運営されているということ意識させることが目的です。学校には多数の生徒が在籍していますから、教師ひとりでは指導を行うことはできません。そのため学校現場では複数の教師がチーム

で指導を行うことが重要となってきます。したがって、グループワークを行わせることによって他の学生の意見をとり入れながらチームでひとつの問題を解決させるということを実践させます。

Q. 当該授業はレポート評価ですが、どのような点を評価の対象とされていますか？

A. ひとは、学級経営案を評価します。その際、学級が成長する仕組みが仕込まれているか、クラスでおきる問題をどのように解決しようとしているかを見ます。また、特別活動の内容については自己の体験を省察し、新しいHR、学校行事が企画されているかどうかを見ています。

Q. 最後に学生に対するメッセージを一言ください。

A. ただ与えられた課題をこなすだけではなく、主体的に学びにふれていくことが重要であると思います。そのためには自ら課題を見つけ、各々の学びを拡大させていく必要があります。



学生FDサミット2011夏

1日目

学生FDサミット2011夏
2011年8月27日(土)

全国各地から多くの学生や教職員が集まった、
「学生FDサミット2011夏」が今年も8月27、28日に
立命館大学衣笠キャンパスで開催されました。

10:30 オープニング

12:05

オープニングは学生FDスタッフ代表、澤野の挨拶から始まって、参加者全員で2日間に渡るサミットへの意気込みを確認し、参加団体各々の紹介により今回のサミットの規模の大きさを実感することが出来ました。また、6つの代表大学に紹介してもらった取り組み紹介では、ユニークな活動をしている団体も発見でき、お互いに刺激し合えるものとなって、どの団体にとっても今後の活動においてプラスになるものとなりました。そして、木野先生から、「学生FDの意義とサミットへの期待」と題したミニトークをして頂いたことで、今回がサミット初参加という人が多かった中、皆の意識や認識の統一が図れました。

12:15 アイスブレイク

13:45

昼食をとりながらのラフな雰囲気、予め決められたグループにそれぞれ分かれ、ウインクキラーというゲームを交えながら、自己紹介や自大学ならではの話をするなど、少人数で楽しめる交流を通して、お互いに親睦を深めました。

14:00 しゃべり場

16:40

共通テーマとして「どうして大学に来ているの」というテーマを題材に、2日目に行われる、テーマ別グループワークへと繋げるステップとして、まずは広義な内容から、それぞれのグループで活発に話し合いを始めました。

17:00 懇親会

19:00

1日目の最後を締めくくったのは、懇親会です。ここに集ったのも何かの縁と言わんばかりに、たっぷりの自由時間を使い、学生や教職員の方々と語り合い、また、ミニゲームをするなどして、交流の輪を広げることの出来た、貴重な時間となりました。



2日目

学生FDサミット2011夏 2011年8月28日(日)

9:30

OP企画

「あなたの悩み解決したるかSP」

ここでは、学生FD活動を行っていく上での悩みや質問を参加者全員で解決していこうという企画を行いました。本企画は、全国から集まった参加者同士で悩みを共有し、アドバイスを送り合うことで、今後の学生FD活動をさらに活発なものにしていこうという目的から、本年度からの新しく始めた取り組みでした。悩みや質問は前日27日にアンケート形式で集めました。当日、会場では、スクリーンに映し出された個々の事案を参加者全員が考え、アドバイスしあう光景があり、より学生FD活動への意欲が芽生えたことだと思います。

10:30

10:40

テーマ別グループワーク

グループごとに小教室に分かれ、1日目のテーマ別グループワークの続きを行いました。大きな3つのテーマ(①「どんな授業がいい?」、②「大学で何がしたい?」③「課外活動って必要?」)の中で、参加者がそれぞれ一番興味のあるテーマを事前を選択して、グループワークに取り組んでいたため、内容の深い話し合いができていました。170分という長い時間でしたが、みなさん真剣にそれぞれのテーマを議論し、改めて大学教育について考える有意義な機会になりました。

13:30

13:40

テーマ別発表(コンペティション)

テーマ毎に集まって、各グループに5分間の発表を行っていただきました。どのグループもこの2日間のまとめを聞き手に伝えるように精一杯発表していました。劇式であったり、人形を用いたりユニークな発表も見受けられました。最後に、全体の場で発表を行うテーマ代表グループを1人1票で選出し、エールで送り出しました。

14:50

15:00

グループワーク代表発表

多くの方に参加していただいたために、テーマ別発表で選出された1グループに代表として、全体で発表してもらいました。250人超の参加者の前でどの代表グループも堂々とさらに様々な工夫を凝らして、発表を行っていました。会場では、自分とは異なるテーマのグループの発表を聞いたことによって、違うテーマについてもフィードバックをすることができました。また、質問も多く飛び交い、参加者の学生FD活動に対する真剣さが伝わってきました。

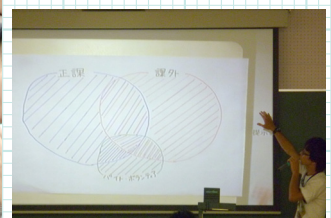
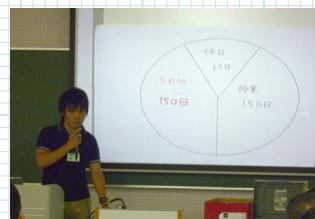
15:40

15:40

エンディング

エンディングでは、サミットのまとめ、閉会の挨拶、追手門学院大学から次回のサミットの案内、閉会宣言、全体写真撮影会が行われました。また2日間の様子を写した写真をスクリーンにダイジェストで流しました。

16:00



感想

今回の「学生FDサミット2011夏」には、例年に増して、多くの方に参加して頂きました。参加して頂いた方に感謝の気持ちを感じると同時に、学生FD活動が全国で行われていることを実感できました。次回の追手門学院大学主催で行われるサミットも、さらに盛り上がることを期待し、楽しみにしています。また学生FD活動が今後もどんどん全国に広がり、より多くの方に学生FD活動を身近に感じていただけることを願っております。

政策科学部1回生 佐藤 陽

感想

「学生FDサミット2011夏」が、今年も立命館大学で開催されました。私は今回がサミット初参加でしたが、主催者側としても一参加者としても、全国から集まった方々とともにとても充実した二日間をおくることができ、自己の成長を実感できるものとなりました。

文学部2回生 谷本 未来

学生インタビュー

Interview

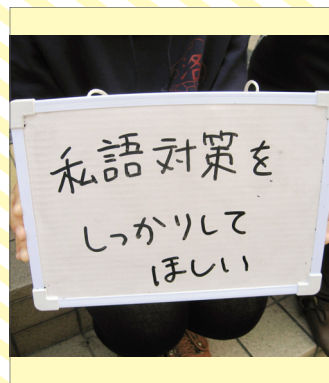
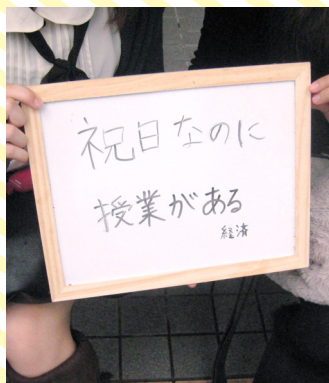
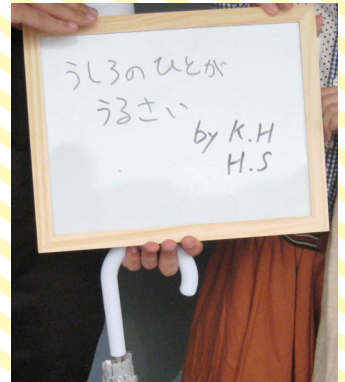
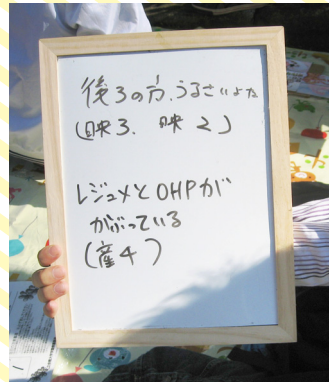
立命館大学学園祭にて

「授業の不満募集中!!」というテーマで
学生インタビューを行いました。



2011年11月5日
BKC学園祭典

小雨が降る中でのインタビュー。スタッフにとっても初めての企画で緊張しましたが、多くの学生にインタビューに応じていただくことが出来ました。特に目立った学生の声は「私語」に関する声でした。また、教室設備や履修の制度に関しての不満もありました。

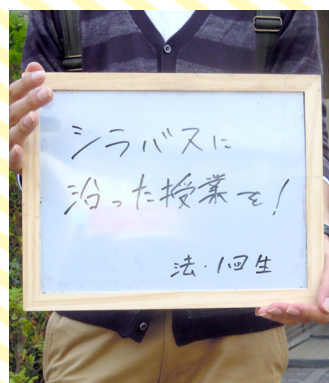
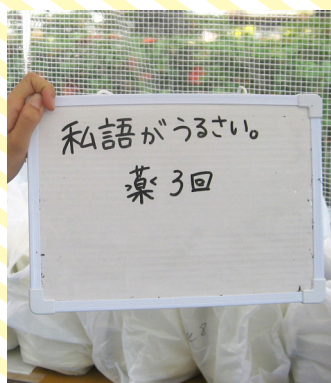
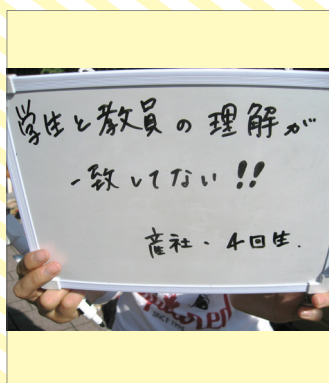
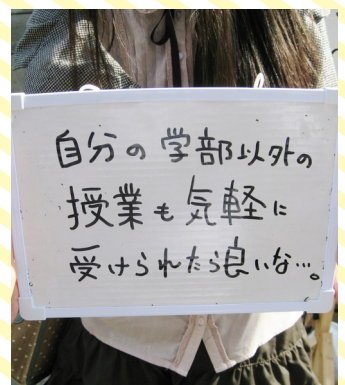
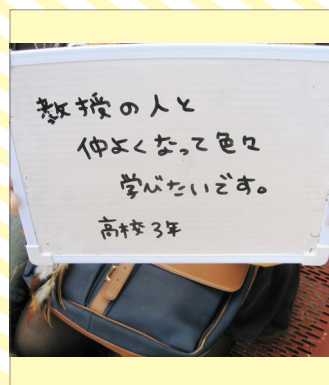
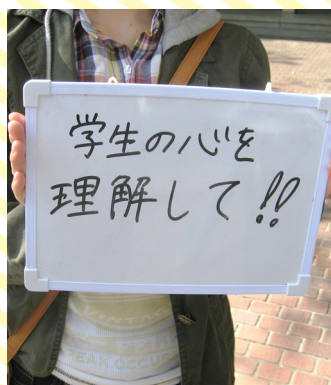


私たち学生FDスタッフは発足当初より授業インタビューという企画を続けてきましたが、今年度は初の試みとして学生にもインタビューを行い、学生の生の声を集約しました。学園祭でのインタビューということもあり、たくさんの学生にインタビューにお答えして頂くことが出来ました。今後は集まった声をスタッフ内で分析して、よりよい大学教育・大学環境をつくっていききたいと思います。

政策科学部2回生 澤野 俊英

11月12日、13日
衣笠学園祭典

衣笠キャンパスでの学生インタビューは11月12日と13日の2日間に渡って実施しました。ここでは本学の学生だけでなく、他大学の学生や高校生、社会人など50人以上から意見を収集することができました。



当初、今回の学生インタビューは本学の学生を念頭においていました。しかし、実際のインタビューでは、本学だけでなく他大学や高校生、社会人と実に多様な世代の人からお話を聞くことが出来ました。そうした、幅広い世代の人からの意見は、学生FDスタッフの活動を相対化し客観的に見つめるという点で、非常に重要な経験となりました。

文学部4回生 久野 敬介

学内しゃべり場

ここが変だよ!?この授業。

しゃべり場では、今私たちが学校生活において感じていること、授業について疑問に思ったことや改善すべきこと、これからの学生FDのことなどを話し合いました。思ったことをいつでも発表できるようにしゃべり場では模造紙を使って意見交換等を行いました。このしゃべり場では自主性を重んじ、それぞれ出された意見を皆で話し合うことで積極的に参加することができたと思います。また、模造紙を使うことで話し合ったことを記録することができ次のしゃべり場に活用することができたので、しゃべり場を重ねることでより深い議論になりました。学生FDスタッフとしては、これからの活動を皆で考え、話し合いをすることで明確な目標が見つかるのではないかと思います。しゃべり場を通して一人一人が主役となって学生FDスタッフとしての活動を考えることができるのでこのような機会を大事にしてこれからも活動に励みたいと思います。

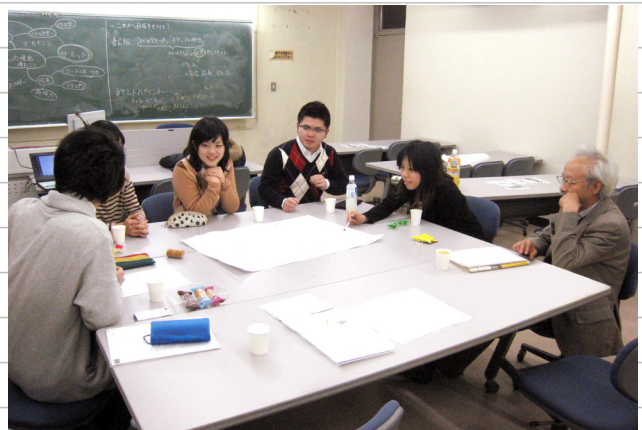
法学部1回生 岩佐 香織



- ・各スタッフが
学生FDの活動で学んだこと
- ・スタッフとしてこれからしていきたいこと
- ・立命館に必要な活動 etc

私たちは「学生FDスタッフ」と名乗っています。しかし、そもそも学生FDとは何を指しているのか。そして、私たちがこの組織に所属し続けている理由はあるのか。そして何をすべきなのか。後期では、それらのことを（学生FD活動の原点である）“しゃべり場”を通じて話し合いました。それぞれが一人の学生として、「学生FDスタッフに入った理由・学生FDスタッフで何をしたいか」といったトピックを話し、それから次回の活動をどのように進めていくか意見を出し合いました。誰が権力を持っているわけでもなく、スタッフのみんなが平等に意見を出し合い、それらを尊重するという考え方がこのスタッフの魅力であると私は思います。次期に何をするのか、そういった内容は今の段階では結論が出ていません。しかし、春期休暇を利用してこのしゃべり場を重ねることで、学生FDスタッフとして何らかの指標が出せるようになると思います。活動形式から活動内容まで、誰が中心になるわけでもなく、学生FDスタッフの意見を集約するために、このしゃべり場で考えていきたいと思っています。一誰もが異なる意見を持ち、それでも同じ目標に向かって進んでいける—学生FDスタッフは、この春休みを通じて、しゃべり場を有効活用したいと思います。

文学部2回生 伝保 香織



他大学交流

5月28日 学生FDのWA! @追手門学院大学

5月28日の「学生FDのWA!!」及び、11月19、20日の「学生FDのWA!!!」に参加しました。この企画では、ファシリテーター(会議を円滑に進める役割)を務めるための講習会で、日本ファシリテーター協会の方々が指導してくださいました。表向きは講習会ですが、内容は大学生が考えるようなものでしたので、楽しく学びつつも、ファシリテーターとしての役割や、会議の進め方などを学べました。11月には、5月に実施したときよりも非常に多くの学生が集まり、この企画にはこれから多くの学生に参加してほしいと思います。また、これまでの企画を立ち上げた追手門大学の学生FDスタッフの力強さを感じる企画でありました。

文学部2年生 伝保 香織



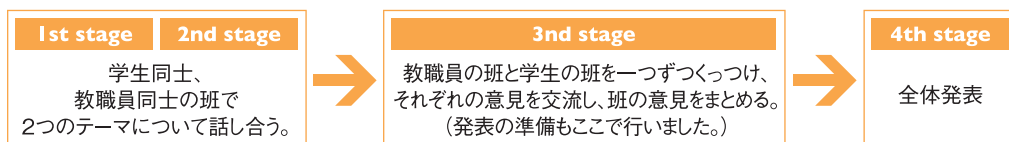
9月3日 FDネットワーク“つばさ”学生FD会議 @山形大学

2011年9月3日、山形大学で、「東日本大震災とわたしたち」をテーマに、FDネットワーク“つばさ”学生FD会議が開かれました。東北や北海道の大学の学生を中心に、60人以上の参加者が集いました。

話し合うテーマは ①「震災時・後に考えたこと・行ったこと:学生と大学の在り方を問う」

②「今後の震災との向き合い方:学生として何ができるか、大学間連携を活かしてできることはないか」でした。

会議は以下のように4段階で構成されていました。



今回の会議は、普段の学生FD活動とは少し異なり、教育そのものについて話し合うものではありませんでしたが、東日本大震災という大災害を受けて、このようなテーマで他大学の学生や、被災地の学生と意見交換ができたことはとても貴重な経験となりました。震災後の被災地での現地の様子や、食糧事情、ボランティア活動などの災害支援の取り組みなど関西ではなかなか聞くことのできない話を聞くことができ、有意義な時間を過ごすことができました。

被災地の復興のため私たちは何ができるのか。私の班では、震災のことを意識し続けること、正しい情報を判断すること、人とのつながりを大切にすること、の3つがあげられました。今回の会議をきっかけにこの3つのことを意識しつつ、被災地の復興に関して私にできる限りの事をしていきたいと思います。

経済学部3年生 野村 美奈

9月10、11日 i*See2011 @岡山大学

2011年9月10、11日、岡山大学の学生・教職員教育改善専門委員会が主催する「i*See 2011」に参加しました。テーマが「大学生生活を充実させるために」ということで、「異なる考えを持った多くの人たちと議論をすることにより、これからの大学生生活を今まで以上に充実させ有意義なものにしよう」という目的で多くの議論が交わされました。

1日目はアイスブレイク、事例報告、全体討論といった全体的場で行われる企画が中心でした。アイスブレイクは、学生FDの企画では珍しく体を動かし、多くの話を聞くことで議論のネタやきっかけをつかむというものでした。事例報告では、特定の学生の一週間のタイムテーブルを基に、その学生が充実感を得ているかを参加者がクリッカーを用いて投票し、後に真相を本人に語ってもらうというものでした。全体討論では事例報告を踏まえて、学生にとって充実には何が一番大切かを議論しました。多くの人に発言をしてもらうため、列毎にマイクを回すことで議論への参加を実感しやすいものでした。

2日目はグループ議論を二部構成で行われました。一部では「大学生生活を充実させるために」という観点から大学ができること、すべきことについて検討しました。二部では、一部の議論内容を新しいグループで報告し、それを基にして大学に望むことを「要求書」、「直訴状」、「嘆願書」などの形式でまとめ、全体的場で報告し、それぞれのグループとの意見を交わしました。



感想

i*See 2011は、大学生活について考える機会が多く学生FD自体考えることは少なかったかもしれません。今回、会場でマイク回しやクリッカーの使用により全体討論といった多人数の企画でもただ聞くだけでなく、参加していると実感できるものが多かったです。学生FDサミットには存在しない魅力がいくつかありました。ここで学んだことをこれからの学生FD活動に活かせるように精進していきたいです。

理工学部3年生 木下 明紀

2011春企画

学生FDのひろば

2011年
2月26日

2011年2月26日(土)キャンパスプラザ京都において「学生FDのひろば」が開催された。この企画は立命館大学主催で行われ、関西圏を中心に学生FD活動に携わる10大学の大学生、教職員合わせ、計47名の参加となった。参加大学には活動開始から数年経過している大学もあれば、学生FDサミットの参加を機に活動を始めた大学も存在し、学生FD活動は近年注目され始めた発展途上の活動であるといえる。なので「学生FDのひろば」の開催するにあたり、「これから学生FD活動をどのように発展していくべきか」という事を念頭に置き、主にグループワークを中心に進められた。今回の企画は3部構成となっており、各大学取り組み発表、しゃべり場(グループワーク)、発表・紹介という流れで進行した。また年2回開催されている学生FDサミットとは異なり、近年学生FD活動に盛んな取り組みをしている学生が参加することで、1つのテーマについて短時間でかつ内容をより濃く議論することが可能となった。発表では、学生FD活動をより多くの人に認識されるように、実際に企画の考案をした班も存在した。今回の企画を通して、各大学の学生FD活動に取り組む学生の活動意識に差があることが明白となり、多くの参加大学に於いて「学生FDサミット」等で得たことを学内に還元できているのだろうか、という懸念が生じた。また「ただ集まって議論するだけでは何も進展しない」という厳しい意見も挙がった。これらの事を踏まえて、各大学でこれまで活動内容を振り返り、今一度学内に成果が現れているのか目を向けていかなければならない。

理工学部3回生 木下 明紀

今回の「学生FDのひろば」は、私が学生FDの活動に参加して初めての他大学との交流の場でした。私は、まだ学生FDの活動自体、よく把握出来ていないということもあり、この交流会は本学、さらには他大学のそれを勉強するという心構えで参加しました。学生FDの活動は、本来的な大学のFDである教員を対象としたものに、学生の視点を加えた、いわゆる「三位一体」ということを基盤に置き実績を重ねてきました。こうした潮流は、先輩方のご努力により、今では関西圏の大学を中心に全国に広まってきました。しかし、そうした「よこのつながり」が拡大していく一方で、学生FD活動それ自体の認識が各大学の一般の教職員、学生の間でそれほど高いものではないという問題が存在するのも現状です。したがって、今後の本学の学生FD活動としては、各大学との「よこのつながり」を重視しつつも、自らの大学での認知度を高めていかなければならないのではないかと感じました。

文学部4回生 久野 敬介

NEWS
LETTER班

「学生FDスタッフとして、何か形ある成果を残したい」そう思って後期から始めた企画の一つが、学内企画である「NEWS LETTER」です。学生FDスタッフの宣伝や、学生間の意思疎通、教員・職員との距離を縮めることができればと思い企画しましたが、大して機能しないまま今期が終わってしまいました。何を進めていけばよいか考えつつ、しっかりと来期の目標をたてるところから始めたいと思います。「学内に向けて何かを発信していきたい」というNEWS LETTER班の考えはこれからの学生FDスタッフにとって、主に広報の面で大切なことであると思います。

文学部2回生 伝保 香織

授業アンケート班

授業アンケートについてミーティングでさまざまなことを話し合いました。

立命館大学では、2006年度後期より、セメスター期間中に受講生と担当教員が、授業のあり方や学習態度について意見交換し、相互に協力して授業改善を図っていく取り組みを実施しています。今年も2011年12月20日(火)～2012年1月16日(月)にアンケートを行い2012年3月Web コースツールおよびオンラインシラバスで発表する予定です。授業アンケートは昨年度からアンケートの自由記述欄がなくなり選択肢だけになっているのでわたしたちはこの問題についてどうすればいいのかを話し合いました。自由記述欄があったほうがより学生の意見が授業に反映されやすいとわたしたちは考えているのでこれからも改善策を考えていきたいと思っています。

法学部1回生 岩佐 香織

編集後記



政策科学部2回生
澤野 俊英

今年度は学生FDスタッフの再スタートの年であったと思います。これまで学生FDサミットの運営をはじめとして、立命館大学の学生FDスタッフは学外において「全国の同志をつなぐ」という役割を果たしてきました。反面、学内に関してはあまり役割を果たせていなかったのではないかと思います。今年度のスタッフは半数以上が新スタッフで、一から学生FDスタッフについての各々のスタッフの想いを集約し、新しい活動を創る一歩を踏み出したのではないかと思います。現在はまだ活動の計画を立てている段階ですが、皆の「想い」がこれからの活動になっていくと考えると今後の学生FDスタッフが楽しみでなりません。



政策科学部1回生
佐藤 陽

学生FD活動の内容をよく知らないまま、他大学との交流事業に惹かれて学生FDスタッフに参加した私でしたが、この1年間の学生FD活動を通して、自分なりに様々なことを発見できました。授業を変えていくことの困難さや学生の意見を汲み取る難しさに頭を悩ますことばかりでした。しかし、この経験はとても貴重なことだと思っています。何事にも前例を変えていくには、まずきちんと物事を見て、原因を解明し、効果を明示して、相手に伝えなければいけないと分かったからです。この発見を大事にして、今後も学生FD活動に携わって行きたいと思っています。



法学部1回生
岩佐 香織

他大学と交流できるサミットに魅力を感じ学生FDスタッフに入って早一年。この一年間様々な出来事がありました。その中でも学生FDサミットは、私にとって非常に貴重な経験であり、「学校をよりよいものにしよう」という強い意志を持った人たちにたくさん出逢えたことはこれからの学生FDスタッフとして活動するにあたり大きな財産となりました。他大学と交流することで自分の大学を見直すきっかけとなり、学生FDスタッフとして自分には何ができるのだろうかを改めて考えることができました。教職員の方々と直につながりが持てるという恵まれた環境を大事にして来年度の活動も積極的に関わっていきたいと思います。



文学部4回生
久野 敬介

今年度はこれからの学生FDスタッフの活動の指針となるような活動や考え方を知る機会が数多くありました。例えば「学生FDサミット2011夏」では他大学の多様な学生FDの活動を知ることができ、また、本学学園祭で実施したインタビューでは大学生だけでなく高校生や社会人の方などから、スタッフの中から導き出せなかったような新たな知見を得ることができました。来年度の学生FDスタッフは、こうした意見を基盤として、より多くの学生が「立命館で学んでよかった」と感じられる教育環境の整備に貢献することができると考えています。

学生FDスタッフ募集!!

皆さんも一緒に学生FD活動をやってみませんか？

学生FDスタッフでは、良い授業づくりや授業・教育を改善するための活動に興味のある方などを募集しております。活動は学生、教員、職員の三者で行っていて、ここにしかない経験もあります。興味のある方は是非お問い合わせください。また定期的にミーティングも行っていますので、いつでもご自由にご参加ください。

応募方法

- | | |
|-----|---|
| 対 象 | 立命館大学に在籍する学生・大学院生 |
| 応募先 | 立命館大学 教育開発支援課 【衣笠】至徳館4F 【BKC】アドセナリオ1F Tel:075-465-8304 Mail:fd71cer@st.ritsumeikan.ac.jp |

立命館大学 教育開発推進機構・教育開発支援課

R RITSUMEIKAN

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 TEL:075-465-8304 FAX:075-465-8318
e-mail:fd71cer@st.ritsumeikan.ac.jp http://www.ritsumeikan.ac.jp/acd/ac/itl/index.html
発行日:2012年3月31日 編集・発行:立命館大学 教育開発推進機構